

ことばはそれ自体のうちに変化を内在させている。「うつりゆくこそことばなれ」とは、かのコセリウ著書の名訳であるが、まさに変化するからこそ言語なのであって、ことばを歴史としてとらえることこそが、言語研究の本質なのである。

著者は、古代語という共時態の「言語表現」を、「動態相」としてとらえることで、新たな方法と解釈を提示する。「動態」ということは変化をかならずしも意味しないけれど、史的展開を見据えないで、動態相の記述はありえない。第一篇第一章の「字形の衝突」は、字形の差異を動態としてとらえることによって、字体の変遷を見据える視点となりうるし、同篇第四、六章では字訓の展開によって、逆に万葉集の訓の確定に寄与する。

「動態」の視点は、一方で、古代文学作品の解釈の方法でもある。第一篇第五、六章と

第二篇の諸章は万葉集、風土記逸文の解釈と密接にかかわる。ここでは、史的展開への視点はひとまず封印される。本書が「史」を標榜するのではなく、あくまで「動態論」である所以である。ただ、だとすると、動態相ということ

が古代文献の解釈に、どのようにならなければならないか、その点の積極的な記述が必要ではなかったか。以下、著者の誠実で堅実な方法に対する当然の褒辞は略し、問題となる部分のみ取り上げることで著者の学恩に報いたい。

本書は「動態としての用字と音訓(用字考究篇)」「動態としての上代語(言語様相考究篇)」「動態としての枕詞(修辞技法篇)」の三篇からなる。

第一篇では、序にも「汎時代的」とされるように、『遊仙窟』古写本の字形や『類聚古集』の古訓など、直接には「上代」以外の問題もあつかわれるが、これは上代文献を

読むための基礎的な方法論としておかれたものである。とくに、冒頭の「字形の衝突」は個別の文献をあつかうときに、「文字の同定」にかかわって注目される。一資料内での類字形の「衝突」が、全体の流れの中でとらえられ、異字か同字かの判定、つまり誤写かどうかの判定に活かす道が模索される。もとより、目的は音韻論と文字論との対応にあるが、文献を扱う基礎論として読みたい。

第二篇第一章では風土記逸文の「訓読」をめぐる「倭文体」の論が展開される。古代の文章作成に訓読が大きくかわることは言を待たないが、そのこととそれがどう訓読されるかということとは、別問題である。風土記逸文の理解ともあわせて、両者の関係がはっきりと読み取れなかった。同第三、四章では、東歌、防人歌の「東国方言」について、東国人が中央言語によって歌を詠出しようとした

結果であるとする。これは浅見徹氏が「観念的俚言」とされたことと、ちょうど裏返しの解釈と理解される。魅力的な考え方であるが、筆録と編纂の問題をどう考えるか、中央官人と東国人との関与の仕方問題が残る。

第三篇は、枕詞の論である。ここでは、折口の「生命指標説」を極力排し、広義言語遊戯としての全体的な把握を試みる。結論に共感は覚える。しかし、折口の指摘した古代の心性は、そのまま首肯できないまでも、有効性について動態としての検討が必要ではなかったか。全否定するのではない解釈の余地はありそうに思える。

最後に、本書に示された、共時態を動態としてとらえることの有効性は、もっと強調されてよい。そこに歴史へのまなざしがある。

(A5版・五一八頁・本体一三六五〇円・塙書房)
| 評者・大阪府立大学教授 |